

妬み情動経験が痛みの主観的強度に及ぼす影響

赤口 諒^{1,4)}, 川崎 有可³⁾, 大住 倫弘^{1,2)}, 森岡 周^{1,2)}

¹⁾畿央大学大学院健康科学研究科神経リハビリテーション学研究室,

²⁾畿央大学ニューロリハビリテーション研究センター, ³⁾畿央大学健康科学部理学療法学科,

⁴⁾摂南総合病院

key words 痛み・妬み・不安

【はじめに】

近年、慢性痛患者の中で痛みが強い者は、不公平をより強く感じている報告されており、その不公平感は痛みの破局的思考、抑うつ程度とも関連があるとされている (Scott, 2012)。不公平感は社会において自己が他者と公平でない場合に抱く感情である。このことから痛みを有する患者は他者と比較することで不安が高まる場合、痛みの感受性に影響を与えられ考えられる。一方で、他者との比較で起こる情動には妬みがある。妬みとは他者が自己よりも優れた物や特性を有する場合に起こる情動であり、それが自己に焦点されると劣等感、他者に焦点されると敵対心を伴うとされている (Smith, 2007)。そこで、本研究は妬みの情動経験が痛みの主観的強度に与える影響を明らかにすることに加え、妬み情動の中の劣等感と敵対心のうちのどちらが痛みに影響を与えるかを明らかにする。

【方法】

対象は健常大学生 20 名 (Affect 群 14 名, Control 群 6 名) とした。心理学的評価として State-Trait Anxiety Inventory (以下 STAI) を用いて状態・特性不安の評価を行った。実験は、①痛み刺激、②課題 (Affect 群: 情動刺激, Control 群: シャム刺激)、③痛み刺激の手順で行った。痛み刺激には熱刺激装置 PAIN THERMOMETER (ユニークメディカル社製) を用いた。刺激部位は非利き手の前腕とした。また、実験中の痛みの慣れの要素を除外するため、実験前に 47-49°C の刺激をランダムに 10 施行 (60 秒インターバル) 行った。痛み刺激の評価は Visual Analog Scale (以下 VAS) を用いて行った。情動刺激には被験者本人が主人公となるように設定されているシナリオ課題を作成した。これは会社員の主人公が重大な企画を任されることとなっていたが、不運にも交通事故に遭い、ライバルに手柄をすべて奪われることで妬み情動を抱かせる内容となっている (スライド枚数約 130 枚, 所要時間約 7 分)。情動刺激の評価には妬みだけでなく、妬みの要因である劣等感、敵対心の情動喚起量を VAS により行った。シャム刺激には世界格国の国旗を説明したスライドを作成した (スライド枚数約 20 枚, 所要時間約 7 分)。統計解析は課題前後の痛みの主観的強度の比較において対応のある t 検定を用いた。情動喚起量と痛みの主観的強度の相関関係にはピアソンの相関係数を用いた。また、劣等感が高い群 (評価結果が中央値以上の者) における STAI と課題後の痛み増加量の相関関係にはピアソンの相関係数を用いた。なお、有意水準は 5% とした。

【結果】

課題前後の痛み主観的強度の比較において、Affect 群において有意な痛みの増加を認めた ($p < 0.01$) が Control 群では認められなかった。情動喚起量 (妬み, 劣等感, 敵対心) と痛み主観的強度の相関関係は、敵対心のみ課題前の痛み主観的強度 ($r = 0.543$, $p < 0.05$)、課題後の痛み主観的強度 ($r = 0.594$, $p < 0.05$) と正の相関関係が認められた。また、劣等感が高い群において、STAI 1 (状態不安) と痛みの増加量の間にのみ正の相関関係が認められた ($r = 0.829$, $p < 0.05$)。

【考察】

課題前後の痛みの比較では、Affect 群にのみ有意な痛みの増加が認められたことから、妬みが痛みの主観的強度に影響を与えることが示唆された。一方で、情動評価における敵対心が課題前後それぞれの痛み評価と正の相関関係が認められた。つまり、自分よりも優れた他者と比較した際、敵対心を抱きやすい個人特性が痛みの感受性に影響を与えていると考えられる。また、劣等感が高い群において、STAI1 と痛みの増加量に正の相関を認めた。これは自分よりも優れた他者と比較した際、劣等感を抱いた場合は、不安の程度に伴って痛みの増加量が変化することが示唆された。

【理学療法学研究としての意義】

理学療法における痛みの評価は感覚的側面のものだけでなく、情動的側面、認知的側面も一般化され始めている。本研究の結果から妬みの情動経験が痛みの主観的強度を増強させることが示唆され、劣等感を抱いた場合、不安の程度に応じて痛みの感受性が変化することが示唆された。さらに先行研究から痛みが原因で不公平感を強く訴える者程、痛みの破局的思考に陥りやすく、抑うつ傾向になるという報告がある (Scott, 2012)。このことも踏まえると、痛みを有する患者の評価には他者との関わり方のパーソナリティを評価する必要がある。つまり、患者特有のパーソナリティを多面的に評価し、理解することが適切な心理的アプローチを可能にし、痛みの慢性化を未然に防ぐことにつながる可能性を本実験で示すこととなった。